全社一体となって、
科学的合理主義と人道主義に基づく
創造的な進歩と発展を図り、
社業の発展を通じて社会に貢献する。

英一番館が描かれた錦絵「横浜英吉利西商館繁栄図」（部分、一恵斎［落合］芳幾画、1871年）

横浜開港直後にジャーディン・マセソン商会がはじめて輸入した珍しい海外の品々を英一番館の店内一杯に陳列している様を描いている

鹿島は、1840年（天保11年）の創業から現在に至るまで、人々が安全・安心で
快適に暮らすことができる社会を目指し、建設事業を通じて産業・経済の発展に貢献してまいりました。
それは鹿島の苦闘と改革、発展の歴史でもあります。

業界の先頭を切って新たな領域に挑戦してきた経営者や社員の中に脈々と流れる
積極果敢な「進取の精神」こそが発展の礎です。
鹿島は、常に時代の動きを鋭敏に捉え、進歩と発展に努力してまいりました。

これからもこのよき伝統を受け継ぎ、この経営理念のもと、
真に快適な環境創造の担い手として社会の要請にこたえられるよう研鑽を積み、
社会に貢献できる企業として歩んでまいります。

経営理念の成文化について（鹿島建設 社史より）

鹿島の経営理念は、その時々の経営者が示した方針や理念、行動の総和として社内に受け継がれてきました。
そのキーワードは、創業者鹿島岩吉の「パイオニア精神」、4代目社長鹿島守之助の「人道主義と合理主義」「科学的管理方法」「鹿島共同体」、6代目社長渥美健夫の「システム力」などでありました。
しかし創業以来140年が経った頃、企業規模も拡大するにつれて、経営理念が「無形」のままでは、その伝承・継承に支障をきたす恐れが出てきたため、7代目社長石川六郎は、これまで社内に受け継がれてきた理念のエッセンスを「経営理念」として再構築しました。
「全社一体」は「鹿島共同体」の理想を実現、「科学的合理主義と人道主義」は「科学的管理法」と「人道主義と合理主義」そのものであり、「創造的な進歩と発展」は「パイオニア精神」「システム力」を根源としたものでありました。
そして「社会に貢献する」と、企業の社会的責任を結語で示しました。

鹿島のあゆみ

Story 1

「進取の精神」を貫き、今日の基盤を確立する。

1840年に創業者鹿島岩吉が江戸中橋正木町で町方大工の店を構えて以来、鹿島は様々な冠で呼ばれてきました。「洋館の鹿島」「鉄道の鹿島」「超高層の鹿島」「原子力の鹿島」――。それらは、「その分野なら鹿島だ」というパイオニアの称号であり、時代の要請に応え続けてきた証明でもあります。鹿島の歩みは、今も受け継がれる「進取の精神」によって具現化されたものだと言えます。

その長い歴史の中で、鹿島は常に自らを進化させる挑戦を続けてきました。1949年の技術研究所設立は、建設業界初の取組みでした。その取組みは、卓越した技術と信頼につながり、社会から「技術の鹿島」という評価を手にするまでになりました。

1840

進取の原点は、洋館への挑戦。

[洋館の鹿島]

鹿島の歴史は、1840年、創業者鹿島岩吉が大工として江戸中橋正木町に店を構えたことに始まります。数々の大名屋敷を建築した岩吉は、その技術を買われて横浜居留地第一号となる「英一番館」の建築を任されることになります。文明開化とともに西洋館建築技術を身につけた岩吉は、その後も多くの洋館建設に携わり、西洋館棟梁として名を馳せました。

蓬莱社（1873年）は、旧土佐藩士・後藤象二郎らが設立した商社。当時、新橋駅と相対する位置にあり、東京の名所の一つだった

1880

日本の礎をつくる。

[鉄道の鹿島／土木の鹿島]

事業を引き継いだ二代目鹿島岩蔵は、それまでの日本には存在しなかった新事業・鉄道建設に転身します。難工事といわれた東海道本線・丹那トンネルの施工を成功させたことで「鉄道の鹿島」の名は高まり、多くの鉄道敷設を任されます。さらに、1900年代に入ると電力需要が急増し、水力発電所の巨大ダム建設にも従事し、「土木の鹿島」として日本の国土開発に大きく貢献しました。

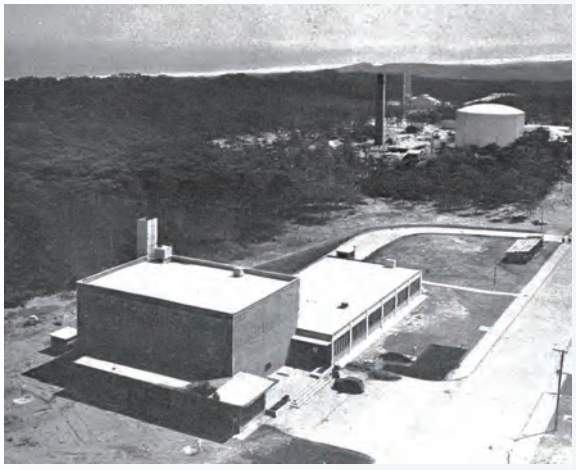
上：矢嶽隧道（宮崎県, 1909年）。坑口前にて発注者、施工者、作業員の記念撮影
下：日本初のコンクリート高堰堤・大峯ダム（1924年, 京都府）。1964年の天ヶ瀬ダム建設で水没

1949

卓越した技術で、次代を拓く。

[超高層の鹿島／原子力の鹿島]

戦後復興から、高度経済成長期に至るまで、鹿島は技術研究所で磨き抜かれた最先端の技術を駆使して、更なる成長の道を歩みます。1965年には、日本初の超高層ビル「霞が関ビルディング」を着工します。日本の経済復興を象徴する金字塔となりました。また、1957年には日本原子力研究所第一号原子炉の完成を皮切りに、原子力分野へ進出しました。「原子力の鹿島」の冠が示す通り、これまでに国内の原子力関連工事の半数近くを任されてきました。



上：完成当時の霞が関ビルディング（1968年）
下：日本原子力研究所第一号原子炉（1957年）

Story 2

新たな飛躍を見据えて、開発事業と海外展開に挑む。

順調な成長を続けていた鹿島。しかし、その「進取の精神」は従前の事業に留まることを良しとはしませんでした。新たな飛躍を見据えて、取り組んだのは事業の多角化と国際化です。設計・施工機能を併せ持つ開発事業もその一つでした。企画・開発から設計・エンジニアリング、施工、建築竣工後の運営・管理、維持・修繕まで、すべてのフェーズで高度な専門家が連携することで総合力を最大限に活かし、オフィスや住宅、商業施設、教育・医療福祉施設など、大規模な複合開発に多くの実績を積み上げています。

また、1899年に海外進出して以来、東南アジア諸国でダム・発電所・ドック工事を多数手掛けるなど、確かな実績を重ねていましたが、その展開を急加速。1964年、日本の建設業初の米国本格進出となるロサンゼルスへのKII設立を皮切りに、現在では世界各国で建設・開発事業を展開。世界各国で、大型複合開発をはじめとした多岐にわたる施設を手掛けています。

1964

グローバル展開が加速。

[海外の鹿島]

1899年に着工した鉄道インフラ建設にはじまり、台湾全島に電力を供給し続ける日月潭水力発電所、ビルマ（現ミャンマー）最大のインフラ施設・バルーチャン発電所など、世界各国のインフラ整備において信頼と実績を積み重ねてきました。1960年代から手掛け続けていた、ロサンゼルスの日本人街・リトルトーキョー再開発プロジェクトは、海外事業躍進の契機となりました。

再生された全米一の日本人街、リトルトーキョー。ニューオータニ・ホテル・アンド・ガーデン（1977年）やカジマビル（1967年）が建つ

1988

開発事業への挑戦。

[総合力の鹿島]

開発事業のはじまりは、民間単独の宅地開発として最大級となる志木ニュータウン（埼玉）の開発でした。用地買収・土地造成・配置計画から設計・施工・分譲販売に至るまで、その総合力が試される国内最大級のプロジェクトとなりました。1980年代後半には「東京イースト21（東京都江東区）」などの大規模開発を各地で展開し、“オール鹿島”の総合力を証明する機会になりました。

上：志木ニュータウン（1988年）
下：自社所有地を有効活用した東京イースト21では、鹿島が自ら事業主となって地域の新たな顔を創出（1992年）

2000～

更なる飛躍を目指して。

2000年代に入り、鹿島の挑戦はさらに加速します。秋葉原開発や虎ノ門4丁目開発など、都市再生プロジェクトにおける大規模複合開発事業に積極的に参入しています。海外においても、ハワイ島の居住型リゾートのフアラライ・リゾートや、インドネシアの首都ジャカルタにある複合施設スナヤン・スクエアなど鹿島の総力を挙げた国際プロジェクトが次々と誕生しています。

上：秋葉原駅前を一新した再開発。左からTOKYO TIMES TOWER（2004年）、秋葉原UDX（2006年）、秋葉原ダイビル（2005年）
下：東京の中枢、虎ノ門の丘に建つ23階建ての賃貸オフィスと41階建ての分譲レジデンスからなる虎ノ門タワーズ（2006年）